



## 第1回

## 伝説の編集人

# ”天皇“の出版社風景

文 森 功

text by Isao Mori

金曜日と月曜日の正午になると、決まってその姿があった。東京・牛込矢来町の新潮社別館前にシルバーのBMWが横付けされ、運転手の市橋義男が素早く後ろに回って後部ドアを開ける。後部座席から杖が地面に伸び、山高帽の老紳士が現れる。右手を口元のパイプに沿え、紫煙を吐き出しながら、わずかに五メートルほどの距離をゆっくと進む。運悪く、その場に出くわした新潮社の社員は立ち止まり、深々と頭を垂れて道を開けるしかない。

それが、何度か目撃した齋藤十一の出社風景であった。

一九五六（昭和三十一年）二月、出版社系週刊誌の嚆矢となる週刊新潮が創刊されて以来、四十年以上ものあいだ、特集記事すべてのタイトルを決めてきた。齋藤は、

け、週刊誌業界の先頭を走ってきたのである。

「新潮社の天皇」「昭和の滝田栲陰」「出版界の巨人」「伝説の編集者」――。

齋藤には、たいそう仰々しい異称がある。数多くの作家を世に送り出し、戦後の新潮社を形づくってきた。斯界では知らぬ者がいないほど有名な出版人である。半面、常に著作を世に問う作家と違い、編集者はその生涯が詳らかになることが滅多にない。ことに齋藤は、新潮社の社員ともほとんど口を利かなかつたからなおさらだ。私自身、新潮社に籍を置いていた頃、すれ違いざまに「こんにちは」と頭を下げた数少ない記憶があるだけである。新潮社内さえ、謎めいた存在だった。

戦前から新潮社に勤務してきた齋藤は、終戦間もない一九四六（昭和二十一年）二月に、文芸誌『新潮』の編集長となる。新潮はその三カ月前に復刊された。編集長の肩書

新潮社の編集部門を統べ、出版界に君臨してきた。

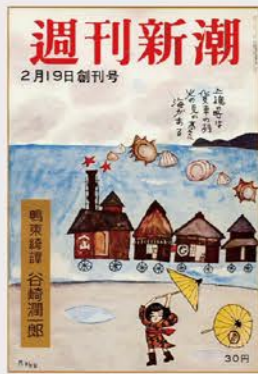
「御前会議」――。かつて週刊新潮の編集部長がそう呼んだ編集会議がある。そのために齋藤は毎週金曜日に新潮社別館に出社した。茶を飲んで一服した頃合いを見計らい、正午過ぎに常務取締役の野平健一と取締役編集長の山田彦彌が、「二十八号」と書かれている重役室のドアを叩く。二階にある齋藤の部屋だ。

御前会議と諷された編集会議では、次の号に掲載する六つの特集記事のテーマを選ぶ。といっても、議論が交わされるわけではない。常務の野平と編集長の山田が畏まって応接のソファに浅く腰かけ、山田が編集部長の書いた二十枚近い企画案を齋藤の前のテーブルに置くだけだ。すると、齋藤が

はそれが最初で最後である。あとはどの編集部にも正式な役職や肩書がない。新潮編集長と同時に取締役役に就任した齋藤の社内の呼び方は、ずっと「齋藤重役」だった。

もとをただせば、齋藤は文藝編集者として新潮社で頭角を現してきた。御前会議のメンバーだった先の野平は戦後間もなく入社し、齋藤に命じられて太宰治を担当した。太宰は『人間失格』のあと『如是我聞』を新潮に連載し、それが遺稿となる。野平は四八年六月十三日、入水自殺を遂げた東京・三鷹の玉川上水に駆け付け、太宰の検視にまで立ち会った。その後、齋藤の腹心として二代目週刊新潮編集長となる。

週刊新潮初代編集長には、副社長の佐藤亮一が就任した。齋藤は



「週刊新潮」1956年2月19日創刊号

それをめくりながら、〇×と印をつけていく。編集会議とは名ばかりで、決めるのは齋藤一人だ。テーマの打ち合わせには、総勢六十人いる編集部長はもとより、特集記事やグラビアを束ねる四人の編集次長さえ、参加できない。

編集長の山田以下六十人の部員が机を並べる週刊新潮編集部は、二十八号室と同じ新潮社別館の二階に広がる。会議のあと山田が編集部に戻り、部員たちに次号の特集記事やコラム記事のテーマを発表する。大方の記事のラインナップが決まり、そこから本格的な取材活動が始まるのだった。

齋藤の興味あるテーマについて、部員たちが齋藤を満足させるために取材に駆け回り回って記事にしていく。そうして週刊新潮は四十年以上も六十万部を発行し続

新潮社創業家の御曹司である亮一の家教師でもあった。言うまでもなく、佐藤編集長、野平次長の後ろで雑誌の創刊を企画し、編集を指揮してきたのが、齋藤である。ちなみにこの頃の御前会議は「円卓会議」と呼ばれ、メンバーは齋藤、佐藤、野平、それに文芸担当の新田敏の四人で構成された。

齋藤は草創期の週刊新潮に五味康祐や柴田錬三郎の時代小説を起用して大ヒットさせ軌道に乗せる。その傍ら、出版・雑誌ジャーナリズムの礎を築き、やがて週刊誌ブームを巻き起こす。

文芸から始まり、音楽や絵画、雑誌ジャーナリズムにいたるまで、昭和、平成を通じて齋藤十一を超える編集者は存在しない。

（敬称略）

### Profile

福岡県生まれ。新聞社、出版社勤務を経て2003年よりフリーランスのノンフィクション作家に転身。08年、09年2年連続「雑誌ジャーナリズム賞作品賞」、2018年『悪だくみ』（文藝春秋）が「大宅壮一ノンフィクション賞」受賞。『許永中』『同和と銀行』（講談+α文庫）など著書多数、最新刊は『官邸官僚』（文藝春秋）

